

令和4年7月16日

北関東フォーラム

於：シムックス

## 中斎塾 北関東フォーラム

### 令和4年度 第7回

#### 「学び」について

おはようございます。塚越参事の開会挨拶は、学びに対する決意表明になっていました。塚越さんの学びに対する考え方、熱意は本物だと感じました。私が30数年出し続けている四季だよりから、「学びとは汗をかくこと」というメッセージを受け取ったということです。これは私自身もそう思って動いていますが、もう一つ「学びにはコストがかかる」という部分は、私はコストを意識しないでやり続けているので反省致しました。何度かお話ししていますが、私は20歳の時、東南アジアの国々を回りました。貧乏学生だったのでコストはかけられないわけですが、真剣に学びたい・行動したいという熱意が周りの人に伝わるにつれて、次第に寄付が集まって出かける事が出来たのを思い出しました。やはり、自分の邪な考えだけで行動するのであれば、応援する人間は出なかったであろうと思っています。

学びについては、別の機会にテーマとして取り上げたいと考えますが、現時点で感じているのは、「学びて思わざれば則ち罔く、思いて学ばざれば則ち殆し」という言葉です。私は論語を50年以上学び続けていますが、まだまだだと思っています。と言いますのは、平成26年に大阪で開催された論語寺子屋サミットに講師でお招き戴いた時、伊與田覚先生と御一緒させて戴きました。論語を90年学び続けておられるという伊與田先生に、「まだ私は浅学菲才でございまして、50年しか学んでおりません」とお話ししたことを覚えています。伊與田先生は安岡正篤先生の高弟で、若い頃は安岡先生から「君は無茶だから、もう少し謙虚になりなさい」と言われたという内容の話を読んでいたもので、傲岸不遜なイメージでおりましたが、非常に好々爺という印象を受けました。安岡正篤先生も晩年は好々爺でした。やはり学んでいるとだんだん角が取れて丸くなり、柔らかい人間性になるのでしょうか。論語を「円珠経」と呼ぶのも、むべなるかなと感じます。学べば学ぶほど角がとれて丸くなり、人をふわっと包んで知らず知らずのうちに正しい方向に導く。そういう学びが本物ではないかと感じています。

もう一つ、学びについて申します。先月、山崎先生から武道に関する本を頂戴しました。南郷継正という方の『武道哲学』です。素晴らしい本でした。難しいことを易しく書いてありました。感心したのは、「教える者は、自分の辿った道を弟子が辿り、自ら悟ってくることが一番嬉しいものだ。またそれが正しい学び方である」とある所でした。師匠が教えてくれたものを鵜呑みにしたのでは、役に立たない。自分の血肉にすれば役には立つけれども、まだ本物にはならない。師匠の辿った道を辿り、師匠が悟ったものを悟る、そして新たな道を切り開いていく。これが師匠の願う道である。・・・安岡先生や天風先生も同じことを説かれていますし、その道を窮めた方には似たような話が沢山残っています。

したがって学び方は、先人の辿った道を同じく辿り、その悟ったものを自ら悟る。そこまで来たら師を凌駕することが出来る。そう考えてよろしいでしょう。しかしほとんどの人はそこまでは行きません。

師匠は、唯一の弟子だと認められた者に対しては写瓶を行います。写瓶とは、自ら会得したものの全てを、選んだ弟子に注ぎ込むことです。それを受けた人間は、また写瓶すべき人物を弟子にしていかなければならない。これは論語の「述」、バトンタッチすることです。バトンタッチすることによって、その人の精神・魂が受け継がれていくものだと私は考えています。

ということで、『武道哲学』を回覧致します。これは第8巻ですが、全部で12巻あるそうですので、全巻読んでみたいと思っています。良い本だと思ったなら、自分の手元に置いて一貫して読み続けることが必要だと思っています。論語もずっと見続けていると、年代年代により経験を積んで自分のレベルが上がった事によって、論語の読み方が変わります。最初に読んだ時と晩年に読むのでは、まるで印象が変わると多くの方が言っています。

## 政（まつりごと）

北関東フォーラムは論語を最後まで読み終わり、前回から新たな局面に入っています。今回は「政」（まつりごと）をテーマに致しました。孔子の時代は、現在言われる「政治」と「宗教（祭祀）」が一体化していました。では、素読をして解説を致します。

○子曰く、<sup>し</sup> <sup>いわ</sup> 政<sup>まつりごと</sup> を為<sup>な</sup>すに徳<sup>とく</sup>を以<sup>もつ</sup>てすれば、譬<sup>たと</sup>えば北辰<sup>ほくしん</sup>の其<sup>そ</sup>の所<sup>ところ</sup>に居<sup>い</sup>て衆<sup>しゅうせい</sup>星<sup>せい</sup>の之<sup>これ</sup>に共<sup>むか</sup>うが如<sup>ごと</sup>し。（為政第二・1）

北辰とは北極星です。夜空に無数の星が輝いている。北極星はその中心にいて、多くの

星は北極星の周りを回っているように見える。人間の行う政治も、天子が中心にいて動かない。その周りをきら星の如く大臣や官僚が並び、天子の周りを回っている。もし、天子が常にその居場所を動いていれば、何処を中心に回ればよいか分からないとお考え下さい。

君主が徳を身に付けて、その徳をもって政の中心にいる。それで政治を実行していけば、世の中は良くなっていくものだ。

為政篇は、政（まつりごと）について孔子の言った言葉を集めています。したがって、為政篇はみな政治に繋がっています。

政治とは、大きく見れば世界全体・人類という見方をすればよいし、それぞれの国の政で考えればよい。それぞれの自治体・組織・会社、詰めてみれば家庭・個人・・・すべて一つの中心を持っていなければならないとお考え下さい。

日本の国であれば、天皇陛下がおられて天皇制が中心にあるわけです。これは、他の国々から見ると羨ましくてならない存在です。政府で見れば、総理大臣がいます。総理大臣が正しいものの考え方で徳治主義を実行すれば良いということです。家庭にあっては、家長がきちんとせねばならないし、個人にあっては、自分の人生は如何にあるべきかを考えて、肚の中に哲学がずっしりと収まっていなければならない。したがって、個人・家・国々・世界・・・全て哲学が根本になければならない、とこの文章で表しています。ですから自分自身に問いかける時は、私はこの世に生まれて何をせねばならないのか、自分の使命は何か、これにはっと思い当たったなら一路邁進すべきであろうと思います。

○子<sup>し</sup>曰<sup>いわ</sup>く、之<sup>これ</sup>を道<sup>みちび</sup>くに政<sup>まつりごと</sup>を以<sup>もつ</sup>てし、之<sup>これ</sup>を齊<sup>ととの</sup>うるに刑<sup>けい</sup>を以<sup>もつ</sup>てすれば、民<sup>たみ</sup>免<sup>まぬか</sup>れて恥<sup>は</sup>ずること無<sup>な</sup>し。（為政第二・3）

この場合の「政」は、法律と解釈して下さい。同じ文字ではありますが、意味が違います。

君主が民を導くのに法律をもって指導し、刑罰によって従わせようとするれば、民は刑罰さえすり抜ければ何をしようと恥と思わない。

刑罰一辺倒ではいけないとお考え下さい。言い方を変えると、刑罰をより細かく厳格化していけば、国が滅びます。官僚が熱心に努力をすればするほど、法律がより細かくより厳しくなります。良い悪いは別の話ですが、その結果として、国民が苦しむし、会社が潰れます。ひいては国家が潰れます。

○子 曰く、富と貴きとは、是れ人の欲する所なり。其の道を以てせざれば之を得とも処らざるなり。其の道を以てせざれば之を得とも処らざるなり。貧しきと賤しきとは、是れ人の悪む所なり。其の道を以てせざれば之を得とも去らざるなり。君子は仁を去りて悪くにか名を成さん。君子は終食の間も仁に違ふこと無し。造次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是に於てす。（里仁第四・5）

孔子の言葉です。

財産と地位・名誉は誰もが欲しがらるものだ。私は正しい方法で手に入れたものでなければ、その地位を得たとしても、私はもうその国にはいない。

財産や名誉が手に入るようなチャンスがあっても、正しい方法でなければ手に入れてはいけない、孔子が実践しているとお考え下さい。

先ほど紹介した『武道哲学』の中にも明確に書いてありました。南郷先生曰く、世に出るチャンスがあれば世に出たいという気持ちは当然あったそうです。出版社からこういう本を書いて欲しいと執筆依頼があったけれども、自分が書きたいもの・書かねばならないものではなかった。また、ベストセラーになるという事も、出版社と自分が考えているものとは違っていた。正しい方法であるとは思われなかったので執筆を断った・・・というくだりがありました。この論語をそっくり実践しておられると感じました。

○子 曰く、利に放りて行えば、怨多し。（里仁第四・12）

目先の私利私欲で行動を起こすと、必ず後で厄介事が起きるものだ。

自分が私利私欲でなくても、周りの目が曇っている場合は同じ事になります。これは大変です。相続問題しかりで、周りが、あいつは私利私欲でやっているのだろうと思った途端にこじれます。したがって、自分自身の身を正しくするだけではいけない。周りからも、あの人は身を正しくしていると思われなければ、ここを理解しているとは言えないと思って下さい。

○君子は義に喩り、小人は利に喩る。（里仁第四・16）

義とは正しい道、道理です。

君子は正しい方法で納得をするが、小人物は私利私欲で判断をする。これが問題だと言っています。

今日のテーマ「政（まつりごと）」は、すべて判断基準について申し上げます。自分が行動する時の判断基準は、正しい道をもってしなければいけないということを一貫して説いています。その大なるものは「政」だにご理解下さい。自分自身に置き換えれば、個人の生きるべき道、家庭を治めていく道、そのように受け止めればよいでしょう。

### 恒例の質問

では、恒例の質問を致します。半年経ちましたから、半年で振り返ってみましょう。

○ 半年間、良い日がずっと続いていると思う方

何度も申しますが、良い日・悪い日は全部主観です。

○ 半年間、嘘はつかなかつたし、嘘をつかれなかつた方

皆さん手が挙がりました。良い人間関係だと思えます。

○ 半年間、有難うと言ひ、有難うと言われることが多かつた方

○ 半年間、身体の手入れをよくやっていると思える方

○ 半年間、自分磨きを一生懸命やっている方

自分磨きを一所懸命やっていたら人格が向上し、ひいては品格も向上すると思っています。

○ 昨晚寝る時、＜明日は良い日だったな＞と思つて寝た方

私は昨晚寝る時、こう思つて寝ました。明日は朝稽古で山崎先生に棒術を教へて戴く。北関東フォーラムで講話する。詩吟を皆さんと練習する。次世代の勉強会に出る・・・すべて順調にいつて良かったなあ・・・と夜寝る前にほつとしている自分を想像して寝ました。今まで自分が毎日やっていることについて安心感があると、これだけ練習して準備をして来たのだから大丈夫だと思える。自分で日々の行いに自信が持てれば、ぐっすり眠れと存じます。

### 時代は激変した

では、テーマに参ります。「令和4年を考える」をベースにして、社会情勢についてお話を致します。

○人が世に出るチャンス之年

令和4年は壬寅です。「君子豹変し・大人虎変す」と何度も申し上げます。今年は、

驚くほど変貌した人がたくさん世の中に出てくる年、そういう時代であると私は捉えています。1月の時点では虎変するのは誰だか分かりませんでしたがお分かりのようにロシアのプーチン大統領が虎変というより激変しました。ゼレンスキー大統領も同じく虎変しました。虎変とは、虎の毛が一気に目にも鮮やかに生え変わることです。プーチン大統領はもともとそういう人物なのでしょうが、ゼレンスキー大統領の場合は、まるで別人になったようだという評価が出ていると思います。

私は今年1月発行の季刊誌「知足」の中で、壬寅について、「今年は世の中が変わる。驚くような人物が出てくれば素晴らしい方向に変わるが、そうでない人物が出れば悪い方向に行く、その境目の年である」と紹介しました。日本という国家で考えた場合、安倍元首相が銃撃され亡くなるまでは、変化の年と捉えていました。安倍さんが銃撃されなくなった途端に、私は時代が変わったと思いました。後世の歴史家が「時代が変わったことを象徴する出来事であった」と評価をする事件であったと私は見えています。この事件の前と後では、国家のあり方が変わった。世界各国の日本の見方も変わった。変化から激変の時代に入ったと捉えています。

激変の時代は、せいぜい今年いっぱいでしょう。来年からは動乱の時代になると思います。そうなると国家であれ企業であれ、「生き残る」ことが眼目になる。動乱になったならば、「生き延びる」です。たった一文字ですが意味が全く変わります。企業が企業として、組織が組織として「生き残る」時代が今です。「生き延びる」は、もう個々の時代に入って来ると思っています。

### ○ロシア・ウクライナ戦争

私が見るにロシア・ウクライナ戦争は、ロシアとアメリカの戦争が始まった事を意味していると思っています。なぜならプーチン大統領が、アメリカが戦争を仕掛けて来たとして理解した事実があります。アメリカには、自国にテロ攻撃を仕掛けた、或いは戦争を仕掛けたと認知した組織や国家について、アメリカ国内にあるその資産を没収出来るという国内法があります。今回アメリカはロシアが戦争を仕掛けたと認知したので、国内法に基づいてロシアの資産を凍結し没収しました。プーチン大統領はアメリカがロシアの財産を差し押さえたという一点をもって、アメリカが戦争を仕掛けて来たのだから核攻撃で応えるぞ！というメッセージをアメリカに対して出したのだと理解しています。したがって両者とも腹の中では戦争の火ぶたが切って落とされたと思っていますが、これはアメリカとロシアの問題であって、目の前、ロシアはウクライナに対して軍事攻撃を仕掛けました。

前回もお話しましたが、私は今回のロシア・ウクライナ戦争で不可解だと思うことがい

くつもありました。一つは、なぜウクライナの情報だけが日本国内に充満しているのかということです。調べて分かった事は、ウクライナはクリミア戦争の反省をもとに、侵攻されてすぐにGAFAMを味方につけるべく動き、特にイーロンマスク氏から宇宙衛星を提供して貰いました。それによって戦況情報がしっかりとれて、尚且つ自分達の情報も発信出来るようになりました。結果として、ウクライナの悲惨な状況が世界各国に流れるようになったわけです。そうするとウクライナの情報だけが流れるから、ロシアは悪でウクライナは善だというイメージが世界各国に刷り込まれました。日本人はメディアが流した情報を頭から信じる人が非常に多いので、その刷り込み通りになりました。ロシアが何を言っても、もうメディアは取り上げない。そういう状況下で現在は来ています。

日本人は戦争についての概念が、もう分からなくなっていると思います。どうして日本はアメリカと戦争をしたのか、戦争はどういうものか、体験ではもう分からない。私も戦争を体験していませんが、戦争でどんな思いをしたのか父親が書き残した本から、その悲惨さがひしひしと伝わって来ました。戦争は人が人を殺すのです。赤ん坊が殺されても誰も助けない。悲惨な目に遭うのが戦争なのだとは誰もが承知しているけれども、平和が長く続き過ぎたために平和ボケになって、もう見えない。日本という国家は完全に平和ボケです。これから戦争の悲惨さというものを味わうのだらうと思っています。歴史をマクロで見れば、人類は戦争が続けば、次は平和が続く。一つの国で見れば、戦争と平和が繰り返されていくわけです。

文明法則史学で言うと、東洋文明が生まれ発展し衰退し、次に西洋文明が発展し衰退する。これを繰り返して、現在は西洋文明から東洋文明への転換期の真っ只中です。東洋文明のこれからの発展の仕方は、多極圏における発展だと思っています。一つの文明で世界全体を覆うわけではありません。

これからは日本の時代だと言われますが、私は当たっていると思っています。なぜなら日本は、日本という一ヶ国で独立した文化・文明圏を構成しています。その中に他の国を併合することは起き得ないと思っているので、日本の領土の中で日本という文化圏・文明圏が生まれ、循環型社会を構成し、それを世界各国がお手本にしたいと思うようになるでしょう。

通貨で言えば、今まではドルが中心で世界は動いていました。現在も主軸はドルですが、他にも人民元やユーロがあり、ロシアのルーブルが欧米の経済制裁に対抗して巻き返して来ています。ロシアはルーブルを使ってゴールドをかなり買っているようですし、もともとのゴールドの算出国でもあります。これからは多極圏におけるそれぞれの国で、デジタル

法定通貨が中心になると思っています。デジタル通貨を国家として法定通貨にした場合は、ゴールドの裏付けが必要と言われています。現在、ゴールドの裏付けをしているデジタル法定通貨候補は、ルーブルと人民元です。残念ながら日本は2周遅れ、3周遅れでゴールドをおさえ始める状況だと私は思っています。日本が一つの独立文明圏に目されている以上、国家としてゴールドをおさえねばならないと考えています。

今年は人が世に出るチャンスOfYearと申しました。ということは、国家が国家として世に出るチャンスOfYearでもあります。その中で注視するのは、中国です。人民元が今、急激に力をつけています。そして14億を超したと言われる人口です。一人っ子政策によって、公表されていない子供たちがいるので、一説には20億人という情報もあります。それだけの人口があるということは、食糧が要ります。エネルギーも要ります。中国は凄まじい進撃をしていると思うので、気をつけていかねばならないでしょう。

### ○コロナとは共存

世間では今、第七波という言い方をしていますが、私はコロナはまだ一波のままだと思っています。僅か2年や3年で区切りがつくようなものではないと思います。スペイン風邪は、極端な数字で言えば人類の4割が亡くなったと言われます。今のコロナは罹る人数は多いけれども、亡くなる人は少ない。ですから今は、さざ波ではないかと感じます。これが、どこかで強毒性で凄まじい感染力を持った亜種が出て来た時には一気に数字が上がって、何億人という単位で亡くなると思っています。それが一段落した後は、インフルエンザのようになっていくでしょう。

今はまだ、目の前の現象で一喜一憂している状況で、共存という意識ではありません。コロナウィルスがインフルエンザウィルスと同じような扱いに変わることによって、最終的に共存するという見方です。

ただ、そういう場合でも食料は枯渇します。現在、食料自給率はカロリーベースで日本は28%、エネルギー自給率は18%です。したがって日本は必死になって自給自足できるように動かなければいけないと思っています。

### ○次の人を育てる

人が育つのは、教え導く人がいるからです。ただ、教え導く人がいても、次の人が生まれる時代環境が整わないと、なかなか次の人が育っていかないのも事実です。先ほど、「変化の時代から激変の時代が変わった」と申しました。激変ということは、次から次に人物が生まれ出る時代、そういうチャンスです。激変だと自覚すると、政治が変わります。国



家の中も変わるし、会社の中も変わります。

激変の世の中になれば、次の人が育つ環境下になります。後は、次の人を育てようと自覚を持っている人物が上にいるかどうかです。上にいれば、次の人は育つべくして育つ。そういう時代背景になったと思っています。上に立つ人は是非意識して、芽が出て来たなら育てて下さい。

お時間になりました。最後に、これからの世の中を見る上で参考にして戴きたいヒントを三つ申し上げます。

一つは、昭和 21 年 2 月 17 日の緊急金融措置令を本氣になって調べて下さい。緊急金融措置令の後に、続けざまに出て来た法令があります。すそ野までしっかり調べる。これが自分の会社、自分自身が生き残るキーワードです。

二つ目は、金利です。世界各国が金利を上げていますが、日本だけは金利ゼロ政策を続けています。これが何故かを考えることです。金利を上げれば日銀が潰れます。日銀が潰れた場合どうなるかを予測して下さい。私は経済破綻を起こした国を見て回りました。結果、ハイパーインフレが凄まじかった。日本がハイパーインフレを起こしたのは、緊急金融措置令と非常に関連が強い。したがって緊急金融措置令を調べれば、ハイパーインフレに繋がり、日本経済が破綻するという所と繋がってきます。

三つ目は、平成 14 年のネバダレポートです。国会で当時の柳沢担当大臣が、日本が国家破綻をして IMF が日本に入った場合どうなるかについて発表しています。ただその頃から日本が危ないと言いつけて今回に来ています。私も『陽明学のすすめ』の中でずっと書き続けています。日本は今、国債を発行し続けてパンパンに膨れ上がった風船になっています。それに鉢の一刺しとなるのが、金利の上昇です。

この三つを参考にして戴きたいと申し上げて、本日の講話を終了致します。